

〔研究ノート〕

聖徳太子信仰成立の歴史的基盤と環境

高 橋 庸 一 郎

一、宗教の発生

日本の最も伝統的な宗教として神道と呼ばれるものがある。しかしこの「神道」とは何か、と定義する事になると其れは極めて困難なことであると感じざるを得ない。なぜならば一口に「神道^①」と言っても、その「神^②」として仰ぐものが一体何であるかが統一されたものではないし、各祠、神社、或いは社などの建築物を持たない場合もあるであろうが、其のまつられる場所によってもそれぞれ異なっているようであるからである。其ればかりでなく、同じ場、同じ神のことであっても時代によってもかなり異なるし、亦時代によっては他宗教の影響も受けたようである。中世には本地垂迹^③という事で仏教と接近し、室町では神仏儒三教^④の調和が唱えられ、江戸の後期には復古神道が盛んになったりしたのは周知の事である。そんな訳で「神道」を一つ概念でくくる事はきわめて困難である。

ここでそんなに改まる必要もないのであるが、一応簡単に「宗教」とはそもそも何かということを考えておく必要があるであろう。

宗教発生の基本は、「人間は死後一体どうなるのか」という恐怖に答えを与えるはずのものである。

古代宗教の誕生は恐らく総て此処に基づいている。この死の恐怖と死後の恐怖から逃れるために、人は自然の眼前の様々な災難や驚異的、脅威的現象に対してそれぞれに見合っていると想われる解釈を施したのである。しかしそのような現象の殆どは解釈する術も無く、ただ其れは、この世を支配している、人智を超えたものの怒りによるものである。と結論付けたのである。故に人はこの「この世を支配し、人智を超えた者」を神と名づけ、その怒りを静めるために、その想定される存在に対してそのつど様々な願いを捧げその怒りを柔らげるようにおすがりし、同時に自分達が生きていくに当たつての安泰と未来への幸せをお願いしたのである。この「お願い」が祈りなのである。

しかし此処で最も困難な問題はどのような「この世を支配し、人智を超えた存在」とは何処に存在しているのかを認定する事である。こうした定義に最もふさわしく感じられるのは世の東西、古今を問わず其れは太陽である。ただ「日」とか「太陽」とか謂うのではなんとなくとりとめが無いので、其れを擬人化したのが所謂「太陽神」であり、「日の神」であり、日本の場合には天照大神（アマテラスオオミ神）である。日本のこの神は太陽神が擬人化されたものである。

宗教学には全くの素人が、一応感想程度のことを此処に書く事になるのであるが、

神が擬人化されるとはどういうことか。其れは神にも家族があり、暮らしがあるとされる事である。其れは人間と全くおなじというわけではないが、例えば場合によつては神にも親がおり、兄弟がおり、子供がいると謂う具合になるということである。故に何でも一番えらい神に祈るのは当然であるとしても、ことによつては、直接最高神を煩わするより、その弟とか、子供のほうが適当であると謂う場合も考えられると謂うこともある。それはつまり神の世界における社会化であり、序列化が生まれてくると謂うことである。

こうした現象は日本のみならず世界各地に残る所謂「神話」を見ればよく理解できる。

そして神を考え、神の世界を考え、その世界の構造を考え、その世界の社会と序列を考え、その社会と序列の間に生じるに違いない多くの矛盾と軋轢を考え、それらがそれぞれ物語りとして生成され結実していったものが神話である。そして其れはある程度人間社会の構造、序列、矛盾軋轢の反映でもあるのである。

しかし最初の「恐怖の神」から此処までの過程を考え出し、その社会構造の序列がある程度成熟した後も神話までの道のりを辿ってくるには相当の歴史的時間が流れる事が必要である。つまり神話の生成は人間の神觀念の発生から考えても相当後のことになるであろう。しかも学説的にいえば日本神話は、高天原系、出雲系、日向系に分かれるらしいし、また比較神話学的に言えば例えば日向系神話は南太平洋系であるとか、そのほかギリシャ系、印欧語族系とかいろいろ海外からの影響を考えねばならないらしい。しかしそうした内外の影響関係がたとえ有ったにしても、こうした一つの纏まりを持った独立性のある神話の発生、成立は、その核としては一部族的であり、一氏族的であると謂うことを見落としてはならない。

二、宗教と神道

話を戻すと、古代人の信仰とは、厳密に言えば現代人でもそうであるが極めて個人的なものである。自然の恐怖から身を守りたいという願いから発する信仰は、様々な対象物に、様々な場で、様々な形を採って表現される。日本人の原始的というか、最も古代的な信仰というものはどんなものであったのかは知る術がない。しかし日本では、少し後のことになるが、昔から「八万社」といわれる多くの所謂神社が祀っている御神体が、神話上の神、想像上の人、動物、また実在した人物や動物など、非常に多岐に互っているのを見ても理解できよう。そう考えてみると、こうした神社の信仰理念を一括りにして「神道」と呼ぶのは極めて不自然であるように思われる。つまり信仰としては最も根本であ

る信仰対象の違う信仰を一つに纏めて捉えようとする自体にそもそも無理があるのである。古代人の一人ひとりの中にそれぞれ異なった信仰が存在するからである。その場合の信仰対象の多くは自然物である。それらは太陽であり、月であり、星であり、天空であり、山であり、川であり、海原であり、大岩であり、大木古木であり、時には大雨であり、大風であり、雲であり、また時には狼や熊や狐などのばあいもあるであろう。ただし共通性のある信仰観念があるとすれば其れは恐らく自らを守ってくれるはずの祖先神であり、それぞれの部族、氏族の守護神としての大本の祖先神であろう。つまり日本の古代人の信仰は、神を祀る社の中に、表の形としてこのような祖先神が信仰対象として表されているかどうかは別として、この祖先神にそれぞれ他の多くの様ざまな、先に挙げたような信仰対象物をプラスしたものであったであろう。

日本人の古代信仰というものは、いうなれば一人ひとりが、或いは一部族一部族がそれぞれ異なった宗教を持っていたのであると考えるほうがより妥当であろう。つまり日本の神社というのは、その建物こそ同質の建築様式で互いに似通ってはいるが、それは当時の日本の建築様式、或いは高級な建築物の様式がさほど多くの変化をもっていなかったと謂うだけのこと、信仰内容はそれぞれまったく異なっているのである。ただそこに国家という一つの強力な権力が登場してくると、そこに束ねられてしまうということになるのであろうが、その束ねからもれているものも当然多いはずである。

だいで後世のものになるが、平安時代初期の「延喜神名式」に登録記載されている神社は二八六一社であり、その祭神数は三一

三三座である。勿論の中には名前として重複している祭神も多いが、基本的にはそれぞれが独立した神社であり、独立した祭神なのである。たとえおなじ祭神を掲げている場合でも、宮社が異なっていれば、お互いに独立しており、相互には殆ど連絡関係は無いのである。

三、神武紀と神祭り

日本への仏教公伝は欽明紀の五三八年とされる。それではその頃までの日本の神や神社の状況はどうなっていたかを少し見てみると、先ず神武天皇即位前紀では、

天皇、彼の菟田の高倉山の巔に陟り、……是の夜自ら祈ひて寝ませり。夢に天神有りて訓へて曰はく、「天香具山の社の中の土を取りて、天平瓮八十枚を造り、并せて厳瓮を造りて、天神地祇を敬祭り、亦厳呪詛をせよ。如此せば虜自づからに平伏ひなむ」とのたまふ。

此処に謂う「社」とは何を祀った神社なのか明らかではないが、現在奈良県橿原市南浦町にある、天香山神社であろうか。小学館が一九九四年に刊行した「日本古典文学全集」の『日本書紀』の頭注には、『延喜式』神名の「天香山坐櫛真命神社」（十市郡）を指すか」とあるが、はつきりとはしない。その後の部分には、「天神地祇を敬祭り」とあるから、この高い山の上で天の神と地の神を祀ったことは間違いない。また後文に、

天皇大すめみことおほきに喜びたまひ、乃ち丹生にみの川上かはかみの五百箇真坂樹いはつまさかきを抜取ぬきにして、諸神もろいづのかみたちを祭りたまふ。此これより始めて嚴いつへの置有おきものあり。時に道臣命みちののおみのみことみことりに勅さしづかしてのたまはく、「今いまし高皇產靈尊たかみむすひののみことを以ちて、朕親われみづから頭齋かうづいを作さむ。

とある。「頭齋」についてこの小学館本の頭注には、「頭・際の語構成で、実際には見えない神が眼前に頭在しているように忌み慎んで祭祀すること。ここでは神武天皇がその神霊の憑人となる祭祀の形態をいう。」としている。しかしこの場合の「諸神」とはどんな神々かはつきりしないが、其れで見るとこれ等の神は自然神ではなく、神武天皇の祖先に纏わる有人格の神々ということになるであろう。またおなじ「神武天皇」四年春二月の条に、

詔みことして曰はく、「我わが皇祖みおやの靈みたま、天あめより降くだり鑑みし、朕わが躬みを光あきし助たすけたまへり。今いまし諸もろもの虜あたま已すに平なけ、海内あめのしたに事無ことなし。以ちて天神あまつかみを郊祀かうしし、用もちちて大孝たいかうを申まをすべし」とのたまふ。

とある。此処には「皇祖の霊」が天降ってくるのに対して、此処で天神を祭つて、我が身がどれほど大孝を尽くしているかをあらわそうとしているのである。此処に謂う「郊祀」とは郊外で天を祭ることである。

以上の「神武紀」に登場する「祭る」「祀る」は、神を祀るのであるが、それらは総て神武天皇家に関わる祖先の神々を言っているようである。勿論これ等の記事は事実ではありえないし、時代的にも恐らく五・六世紀から七世紀ぐらいの習俗に基づいて記

述されたものであろう。ということとは、自然物に宿る多種の神を崇めると謂う、謂わば原始宗教とは全く異なったものになっているのである。

四、崇神紀と神祭り

崇神天皇紀四年の詔に、

惟これ、我わが皇祖みおや、諸天もろあめの皇等すめみことたちの宸極あまつひつきを光臨しらかしめししことは、豈あに一身ひとしの爲ためならむや。蓋けだし人神じんしんを司牧ととのへ、天下あめのしたを經綸をさめたまふ所以ゆゑなり。

とあり、天皇は人も神も「司牧」とするというのである。これは天皇を、神をも采配すると謂う高い立場にあるものと認識しているようにも想われるが、一方神を天皇より低い一般の人と同じ立場にあるものとの認識が感じられなくもない。こうした認識の背後には、神と天皇は非常に近い立場にある、つまり司牧される神とは天皇の祖神達であつて、言い換えれば天皇の身内であると謂う認識があるのであろう。故にこの場合の神とは謂わば「祖先達の霊」というぐらいの意味であらう。しかも其の祖先の霊たちはすぐ身近に存在していると謂う感覚である。またすぐこの後の、六年の条には、百姓の中には流亡離散するものや、齒向かうものの勢いが強かつた為に、

是こゝを以ちて、晨つとに興おき夕ゆふに惕おそり、罪つみを神あまつかみに請うかみたまふ。是こゝより先に、天照大神あまてらすおほみかみ・倭大国魂二神やまとくにたまふたはらのかみを並びに天皇の大おほ殿との

の内に祭る。

とある。この「神祇」とは天神地祇であつて、これは天照大神、倭大国魂とおなじであるらしい。この後文に、

故、天照大神を以ちて豊鍬入姫命に託け、倭の笠縫邑に祭り、仍りて磯堅城の神籬を立つ。亦日本大国魂神を以ちて淳名城入姫命に託け祭らしむ。

とある。最初宮中に祭られていたこの二神がこのあたりから宮中の外で祭られるようになったらしい。これはこの二神を天皇家から離して、百姓一般にまでその信仰を広げようとする意図があつたのかもしれない。崇神天皇紀は、その名にも由来するのであろうが、非常に神憑りのな天皇である。七年の春の詔に、

「……意はざりき、今し朕が世に当りて数災害有らむとは。恐るらくは、朝に善政無くして、咎を神祇に取れるにか。蓋ぞ命神亀へて災を致す所由を極めざらむ。」とのたまふ。是に天皇、乃ち神浅茅原に幸して、八十万神を会へて卜問ひたまふ。是の時に、神明、倭迹迹日百襲姫命に憑りて曰はく、「天皇、何ぞ国の治らざることを憂へたまふや。若し能く我を敬ひ祭りたまはば、必当らず自平ぎなむ」とのたまふ。天皇問ひて曰はく、「如此教ふは誰の神ぞ」とのたまふ。答へて曰はく、「我は是倭国の域の内に居る神、名を大物主神と爲ふ」とのたまふ。時に、神語を得て教の随に祭祀る。

とある。此処に謂う「大物主神」とは、「神代紀上」に出てくる大三輪の神で、今大神神社に祭られている神であるらしい。また秋八月には、

倭迹速神浅茅原目妙姫・穂積臣が遠祖大木口宿禰・伊勢麻績君三人、共に同じ夢みて奏して言さく、「昨夜の夢に一貴人有り。誨へて曰く、「大田田根子命を以ちて大物主大神を祭る主と爲し、亦市磯長尾市を以ちて倭大国魂神を祭る主と爲せば、必ず天下太平ぎなむ」といふ」とまおす。……天皇、即ち親ら神浅茅原に臨し、諸王卿と八十諸部とを会へて、大田田根子に問ひて曰はく、「汝は其れ誰が子ぞ」とのたまふ。対へて曰さく、「父を大物主大神と曰し、母を活玉依媛と曰す。……とまおす。……天皇の曰はく、「……乃ち物部連が祖伊香色雄をして、神班物者とせむとトふに、吉し。又、便に他神を祭らむとトふに、吉からず。

又続いて

十一月の丁卯の朔にして己卯に、伊香色雄に命せて、物部八十手が作れる祭神之物を以ちて、即ち大田田根子を以ちて大物主大神を祭る主とし、又長尾市を以ちて倭大国魂神を祭る主としたまふ。然して後に、他神を祭らむとトふに、吉し。便ち別に八十万群神を祭り、仍りて天社・国社と神地・神戸を定めたまふ。是に疫病始めて息み、国内漸に謐り、五穀既に成りて、百姓饒ひぬ。

とある。こうして見てくると、天神地祇、つまり天照大神や倭
 大国魂神と言えどもやはり天皇家の氏神、皇祖の身内の神という
 観念が見て取れる。更に九年春三月の条に、

天皇の夢に神人有して、誨へて曰はく、「赤盾八枚・赤矛八竿
 を以ちて墨坂神を祠れ。亦黒盾八枚・黒矛八竿を以ちて大坂神
 を祠れ」とのたまふ。四月の甲午の朔にして己酉に、夢の教に依
 りて、墨坂神・大坂神を祭りたまふ。

とある。此処に謂う「墨坂」とは小学館本の頭注釈に、「奈良
 県宇陀郡榛原町の大和と伊勢を結ぶ要路」とある。また大坂は同
 じく、「奈良県北葛城郡香芝町孔虫、二上山北側の穴虫越えて、
 西の河内に出る要路」とする。恐らくこの二条の道は、古来から
 人のよく行きかう道であつて、しかも当時は山深く、木々の生い
 茂った山中であつたために、追いはぎ、盗賊の類などがよく出沒
 し、そのため人々は其のあたりに魔物の存在を想像して、其の魔
 物の跳梁を鎮めるために、此処に鎮めの神を祭つたのであろう。
 だからこの二柱の神は要は土地神・土地鎮めの神である。こうし
 た土地神は殆ど国家権力や、地方権力とは関係の無い神で、後
 に、多くは村の鎮守の神や道祖神に収斂されていったものであろ
 う。また十年七月の詔に、

民を導く本は、教化くるに在り。今し既に神祇を礼ひ
 て、災害皆耗きぬ。然れども、遠荒の人等、猶し正朔をうけず。

とある。ここでもやはり天皇は天神地祇を最も頼りにしている

のであるが、其れがうまくいかないと嘆いているのである。この
 後十年九月の条に、孝靈天皇の妃である細媛命の子、倭迹迹日百
 襲姫命が大物主神の妻となる。しかし、この神の本当の姿が小蛇
 である事を知つて驚き叫んだのであるが、其の事によつて大物
 主神は恥をかき、倭迹迹日百襲姫命は其れを後悔し、恥じて箸で
 陰を突いて死んだと謂う説話が書かれている。ここに書かれてい
 ることは、神はその本来の姿こそ人とは異なっているもののその
 行動様式には人と全く異なる所がない。そして、「是の（倭迹迹
 日百襲姫命の）墓は、日は人作り、夜は神作る」とある。此処で
 は神と人は全くの同列である。また十二年秋九月の条に、

始めて人民を校へて、更調役を科す。此を男の弭調、女の手
 末調と謂ふ。是を以ちて、天神地祇、共に和享ひて、風雨時に
 順ひ、百穀用ちて成り、家給人足り、天下大きに平なり。

とある。此処の天神地祇とは所謂天の神、地の神を謂うのでは
 なく、所謂自然全体を指しているのであろう。つまり自然の法則
 と人間界の制度がうまく調和していると謂う事を言っているので
 あろう。亦六十年の秋七月の条に、

群臣に詔して曰はく、「武日照命（以下小書き）（一）に云は
 く、武夷鳥といふ。又云はく、天夷鳥といふ。」の天より将来れ
 る神宝、出雲大神の宮に藏めたり。是見まく欲し」とのたまふ。
 則ち矢田部造が遠祖武諸隅を遣して、献らしむ。是の時に当
 り、出雲臣が遠祖出雲振根、神宝を主れり。是、筑紫国に往りて
 遇はず。其の弟飯入根則ち皇命を被り、神宝を以ちて、弟甘美韓

日狹と子鷗滯^{ひさかたこくわづぬ}とに付けて貢^{たてまつ}上る。既にして出雲振根、筑紫より還^{かへ}り来りて、神宝を朝廷^{みかど}に献^{たてまつ}き、其の弟飯入根を責めて曰く、「数^{いくばくの}日か待つべきを。何を恐^{かしこ}みてか、輒^{たやす}く神宝を許しし」といふ。是を以ちて、既^{すで}に年月は経^{としま}れども、猶^{なほ}し恨^{いまだ}忿^{しほり}を懷^{いだ}き、弟を殺^{ころ}さむとする志^{こころざし}有り。

此処から読み取れる事は、第一に、出雲大神の宮には天から將來されたと謂う神宝が納められていたと謂うこと。第二に、この神宝は極めて重要なもので、弟の命に代えても守るべき価値あるものであるらしいと謂うこと。第三に、この神宝は当時の中央政権によつて、何らかの方法によつて奪い取られたと謂うこと。

である。しかし考えられる事は、この時奪い取られた神宝の中には、神宝そのもののばかりでなく、神宝に纏わる一切のものも含まれていたのではないかということである。例えばこの神宝に纏わる伝承説話、或いはそれらに関係する伝統制度、風俗習慣などである。其の裏づけとして、『書紀』はこの後、弟飯入根は兄の振根に殺され、中央の朝廷はこの兄の振根も誅滅してしまうのである。天皇は出雲と朝廷とのこうしたいざこざを清算するため、結局は勅を下して出雲大神を祭らせることにしたのである。このあたりに大和朝廷と出雲大神を抱えた出雲政権との関係の初期的な段階を見ることが出来るであろう。

五、垂仁紀と神祭り

「垂仁天皇紀」の神祭りで有名なものは、伊勢の祭祀である。二十五年春三月の朔の条に、

天照大神を豊稻入姫命より離ちまつり、倭姫命に託けたまふ。爰に倭姫命、大神を鎮め坐せむ処を求めて、菟田の筱幡に詣り、更に還りて近江国に入り、東^{あづま}美濃を廻り、伊勢国に到る。時に天照大神、倭姫命に誨^{をさ}へて曰はく、「是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する国なり。傍国^{かたぐに}の可^い怜^{れな}国なり。是の国に居らむと欲^{おも}ふ」とのたまふ。故^{かれ}、大神の教の隨に、其の祠^{やしろ}を伊勢国に立て、因りて齋宮^{いづみのみや}を五十鈴川の上に興^たてたまふ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。

とある。また二十六年秋八月の条には、

先の崇神天皇のところでは、「日本大国魂神を以ちて淳名城入姫命に託け祭らしむ。」としたことの続きとして、
天皇、物部十千根大連に勅して曰はく、「屢使者^{しばしばつかひ}を出雲国に遣^{つかは}し、其の国の神宝^{かむたから}を検校^{けんかう}せしむと雖も、分明^{わきま}しく申言^{まを}す者無し。汝親^{いそみづか}ら出雲に行りて、検校^{けんかう}し定むべし」とのたまふ。則ち十千根大連、神宝を校定^{かうてい}して、分明^{わきま}しく奏言^{まを}す。仍りて神宝を掌^{つかさど}りしめたまふ。

とある。こうして見てくると、例えば先の崇神天皇のところでは、「日本大国魂神を以ちて淳名城入姫命に託け祭らしむ」とある。またいまここでも、「天照大神を豊稻姫命より離ちまつり、倭姫命に託けたまふ」とあるところを見ると、神を託くされるのはどうも女性が多いように想われる。或いは亦、「是の時に、神明、倭迹迹日百襲姫命に憑りて曰はく、「天皇、何ぞ国の……」等と神が抛り付くのもやはり高貴の女性であるらしい。恐らく『魏志倭人伝』に、卑弥呼なる女王が登場するのも、このような

背景が存在したからであろう。ただ一般に女性には出産や女性特有の身体的事情などがあるために、ずっと生涯神に仕える事は出来ないと言われざるを得ない条件がある。それに、時の権力あるものが所謂神の力を自分の勢力に引き入れようとする時、其の神の力を持つものが女性では謀議に組み入れる事が難しいと謂う事情から、抛り付きを女性から男性にうつしていったのであろう。故に最古の事は知らず、後には神に仕える専門職は男性ということになっていったのであろう。

序に記しておく、また二十八年の条には、

故、弓矢と横刀を諸神の社に納む。仍りて更に神地・神戸を以ちて祠らしめたまふ。蓋し兵器をもて神祇を祭ること、始めて是の時に興れるなり。この後、天皇の母弟倭彦命の死に際して、近習の者を生けながらにして陵墓に埋めたが、数日経ても死なず、昼夜泣き叫び、遂に死ぬと腐つて、犬や鳥が集まり嘸むという。このときの声を聞いて天皇は心傷ましく想い、以降殉死はやめさせたとの記事がある。しかしこうした無残な記事のところには神祭りは全く登場してこない。つまり当時の神祭りはただただ天皇家のためだけについて存在したのであると謂うことがこのことから理解される。因みにこれ以降君王の陵墓に生き人を埋め立たすのはやめて、出雲国の土部耆伯人を召し上げて、自ら土部等を率いて、埴輪を作つて、其れを陵墓に埋め立てることにしたという記事がある。此処で亦出雲の登場である。

六、出雲風土記と神祭り

時代は些か降る事になるが、『出雲風土記』の意宇の郡に、和

爾に遇ひ賊はれて帰らなかつた娘の敵を取ろうとした父の猪麻呂の言葉として次のようにある。

天神千五百萬はしら、地祇千五百萬はしら、并に、當国に静まり坐す三百九十九社、及、海若等、大神の和み魂は静まりて、荒み魂は皆悉に猪麻呂が乞むところに依り給へ。

とあつて、巻頭の「合せて神の社は三百九十九所なり。一百八十四所は、神祇官に在り。二百一十五所は、神祇官に在らず。」とあるのに一致しているがまた天神地祇合わせて三千万はしらということになり、是は恐らく当時の出雲の全人口を遥かに超える数であろう。また神社についても、他の諸国がどれくらい神社を擁していたか知られないが、一国で四百にのぼるとは大変な数である。たとえこれ等の数字にかなりの誇張があつたとしても、この辺りからも出雲の国が、極めて神域に近いとされていた言うことが認識されよう。また出雲郡宇賀の郷の条に、

磯より西の方に窟戸あり。高さと広さと各六尺ばかりなり。窟の内に穴あり。人、入ることを得ず。深き浅きを知らざるなり。夢に此の磯の窟の邊に至れば必ず死ぬ。故、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂・黄泉の穴と号く。

此処には人が死んでからの、あの世に行くための入り口があるというわけである。しかし興味がもたれることは、此処では、人の「死」や「あの世」と、神は全く関係が無いらしいことである。つまり神の世界とあの世とは関係が無いのである。『書紀』

「神代上」にも、

然して後に伊奘諾尊、伊奘冉尊を追ひ、黄泉国に入りて、及び共に語りたまふ。時に伊奘冉尊の曰はく、吾が夫君の尊、何ぞ来ますことの晩きや。吾已に黄泉之竈しつ。然りと雖も吾寢息まむ。請ふ、な視たまひそ」とのたまふ。伊奘諾聴きたまはず、陰に湯津爪籬を取り、その雄柱を牽ぎ折きて乗炬として、見せば、膿沸き虫流れたり。……乃ち急ぐ走廻歸りたまふ。……時に伊奘冉尊恨みて……乃ち泉津醜女八人を遣し、追ひて留めまつる。故、伊奘諾尊、剣を抜き背に揮きつつ逃げたまふ。……後に則ち伊奘冉尊も自ら来り追ひたまふ。是の時に伊奘諾尊、已に泉津平坂に到ります。……故、便ち千人所引の磐石を以ちて、其の坂路に塞へ、伊奘冉尊と相向きて立ち、遂に絶妻之誓を建したまふ。

とあり、ここでも神の世界とあの世とは関係がないのである。結局神道から見れば、日本人にとって死後の世界と神は関係がなく、神々の世界はあくまでこの人間の現世と、いわば横に繋がったもう一つの別の世界に過ぎないのである。因みに『出雲国風土記』には、「天の下造らしし大神」と言う表現が何度も繰り返して出て来る。この大神とは、大穴持命のことで、大国主命のことであると云う。神はこの世を作り、それを司りするが、黄泉の世界については全くの無力であるか、或いは全く影響力をもっていないのである。この辺に大和のみならず、当時の日本人が原始的に抱いたであろう宗教意識と些か異なつた、つまりある纏まりのある体系化された宗教から一步離れた意味での神の存在観を見て取る事が出来るのである。つまり此処に教理宗教とは違つ

た神意識の成立を考える事が出来るのである。

七、朝鮮民族の宗教性

このような考え方は、或いは朝鮮半島における神観念と関係があるかもしれない。朝鮮古代文化における、神に仕える道は万神とか花郎とか呼ばれ、今謂うところの所謂ムダン（司祭者）である。ムダンは神に仕えるものあるいは、神に依り憑かれる者ではあつても神ではない。しかしそれでは其の神とはどのような存在であるのかはつきりしない。『三国史記』も『三国遺事』にも、この神の本来的なあり方に言い及んだ部分は見当ら無い。半島に於ける神はどうも、「天の下造らしし大神」ではないし、よつて其処には「天の下治しめす」と云う観念も勿論無い。また更に天を造り支配すると謂う観念が無いのも当然である。十三世紀頃になつたとされる『三国遺事』『紀異第一古朝鮮』の項には朝鮮で最も古い、権威ある、「檀君神話」が収められているが、其処には次のようにある。

古朝鮮（王儉朝鮮）

魏書云。乃往二千載。有檀君王儉。立都阿斯達。（經云無葉山。亦云白岳。在白州地。或云在開城東。今白岳宮是。）開国号朝鮮。与高（禿）同時。古記云。昔有桓因（謂帝釈也）庶子桓雄。数意天下。貪求人世。父知子意。下視三危太伯。可以弘益人間。乃授天符印三箇。遣往理之。雄率徒三千。降於太伯山頂（即太伯、今妙香山。）神壇樹下。謂之神市。是謂桓雄天王也。將風伯。雨師。雲師。而主穀。主命。主病。主刑。主善惡。凡主人間三百六十余

事。在世理化。時有一熊一虎。同穴而居。常祈于神雄。願化為人。時神遺靈艾一炷、蒜二十枚。曰。爾輩食之。不見日光百日。便得人形。熊虎得而食之。忌三七日。熊得女身。虎不能忌。而不得人身。熊女者無与爲婚。故每於壇樹下呪願有孕。雄乃仮化而婚之。孕生子。号曰壇君王儉。(魏書に云く。乃ち往かし二千載。壇君王儉有り。都を阿斯達に立つ。〔経に無葉山といふ。亦た白岳と云ふ。白州の地に在り。或ひは開城の東に在り。今日岳の宮なりと云ふ〕開国し朝鮮と号す。高(堯)と時を同じくす。古記に曰く。昔桓因有り。(帝釈と謂ふなり)。庶子桓雄。数しば天下を意ひて。貪りて人の世を求む。父子の意を知り。下に三危大伯を視るに、以つて弘く人間に益すべきとす。乃ち天府の印三箇を授けて。遣り往きて之を理さめしむ。雄徒三千を率ゐて。太伯山頂(即ち太伯は今の妙香山)の神壇樹の下に降る。之を神市と謂ふ。是を桓雄天王と謂ふなり。風伯、雨師、雲師、を將ゐて、穀を主さどり、命を主さどり、病を主さどり、刑を主さどり、善惡を主さどらしむ。凡そ人間の三百六十余事を主らしめ、世に在りて理め化す。時に一熊、一虎有り。穴を同じくして居する。常に神雄に祈り、化して人と爲るを願ふ。時に神靈艾の一炷と蒜二十枚を遣りて曰く、爾輩之を食し、日の光を百日見ざれば、便ち人形を得む。熊虎得て之を食し、三七日忌みて、熊女身になるを得たり。虎忌むこと能はずして、人の身となるを得ず。熊女は与に婚をなす無し。故に、毎に壇樹の下に於いて、呪して孕むこと有るを願ふ。雄乃ち仮に化して之と婚ず。孕みて子を生み、号して壇君王儉と曰ふ。)

是は神話とは言いながら、決してそんなに古いものではない。

朝鮮王朝の開国神話と見ると十四世紀ぐらいに成ったものと思われる。しかしこの中にも朝鮮民族の古代の風俗が含まれていると考えると、幾つかの注目すべき点がある。つまり、

① 朝鮮民族の祖先は天から降りてきた、桓雄という者であったらしい。

② 其の父親の桓因が天上の世界を作ったのかどうかはわからない。また天上世界の状況はどのようであつたかも知解からない。

③ ただ桓雄は人間の三百六十余事の凡てを主さどつたというのである。しかしこの「主さどる」とは具体的にはどうする事なのかははっきりしない。

④ 後は、この桓雄が熊女と結婚して子を生み、其れが朝鮮王朝の初代王、王儉であるという。

以上のことから解かる事は、朝鮮王朝の根本的な出自ははっきりしないと言ふこと、それと天孫系の王がこの世界に進出してきて、この世を支配する事になった時の権勢の力の強さがはっきりしないと謂ふことである。つまり是は神話というよりも、朝鮮王朝の正当性を主張するために後世、取つてつけたように付加えられた説話に過ぎないのである。こうした説話からは、朝鮮民族のもつ基本的な宗教性を導き出す事は出来ない。朝鮮民族の宗教意識は、この説話の成立よりずっと以前、半島三国時代以前から既にあつたと想われる、原始的アニミズムから発した、所謂神降ろし、神憑り付き的なムダンの宗教性こそがやはりこの民族の最も正統な宗教性であろうと考えられる。

ムダンは日本にもかつて、或いは今猶存在しているのかも知れない、所謂加持祈祷師である。『日本書紀』、『敏達紀』の冬十一

月に百済国王から献られた六人の技術者の中に、「呪禁師」というのが存在している。小学館本には、「仏法の呪を誦して病氣や災難を払うひと。律令制では宮内省の典樂寮に俗人の呪禁師二人・呪禁博士一人が置かれた」と注釈が施されている。こうした呪い師や占い師の類は、古代何処の世界でも発生し、盛行する時代というのがあるものである。激しい大声の祈祷と、人事不省の錯乱状態の狂声狂乱の歌舞によって神憑りと成った祈祷師が、神に成り替わって祈祷依頼者に、神のお告げを、或いは既に亡くなった親類縁故者のことばを宣託するのである。こうした祈祷師を朝鮮ではムダンと呼ぶのであるが、朝鮮ではきわめて長い歴史と、上下貴族、民衆の間に非常に広範な広がりを持つていたと謂うことである。日本でも同様の習俗があったようであるが後に仏教或いは山岳信仰と結びついて、所謂修験道が発生していくのである。

そんなにはつきりと認識されているわけではないが、日本にもこうした加持祈祷というものは存在していた。ただ日本では恐らく仏教伝来以後日本独自の陰陽道の一部として存在し発展して行ったのかも知れない。或いは歴史的には下層民の間に、所謂まじないの一つの形態として存在していたのかも知れない。即ち日本ではこれ等、加持祈祷やまじないが、一つの宗教として組織的に成立する事は無かったように想われる。

日本にはこれ等以外に古来修験道というものがあつた。修験道は加持祈祷と山岳信仰と自己鍛錬修行と更に後には道教的神仙思想が結びついたものといえる。ただこうしたものは後に山岳、神仙、修練等という点で、半島經由での大陸の道家思想や儒教思想の影響を受ける事にはなるが元々は日本固有の民俗信仰に根を張

つていたものであろう。

此処で注意しておかなければならない事は、これ等の信仰は、殆ど国家権力、或いは上層貴族、氏族と結びつくことなく、故に民族的ではなく、極めて個的であり、百姓（おほみたから）的であり、民俗的であると謂うことであらう。

八、聖徳太子信仰成立の環境

以上見てきたように、古代日本の宗教的基盤というものは、極めて決めの荒い、散在的なものであつた。後に入ってきた仏教も当初は非常に個的な受け入れられ方であつた。蘇我馬子という一個人の意志に基づいて、一個人に託せられた信仰に過ぎなかつた。それが国家宗教として確立されるのは聖武天皇の時代であり、いまし早いものと考えられるとしても、皇極天皇期の「仏教興隆の詔」以降のことであり、それは所謂仏教公伝の百年以上後のことである。

しかし本来の日本の民俗信仰は、仏教のような、天皇家を始めとするような有力貴族、豪族等の後ろ盾を持たず、それこそ民間の間に営々として生まれ、営まれ、拡大拡散していったのである。こうした日本の進行状況の中に仏教が突然はいってきたのである。一般の日本人にとって、それは恐らくそんなにすぐには受け容れられないものであつたであらう。即ち經典を通じて広められるはずの仏教理論や信仰は、天皇家や、天皇家に深く繋がる蘇我氏を中心とする一部の上層豪族にゆだねられるとして、一般の百姓（おほみたから）にとつては、近寄りがたく、威厳に満ちた、冷たい仏像ではなく、また理論ではなく、深く考えることな

く、目で見て直ぐに理解でき、耳で聞いて直ぐに理解できる、自身の生き生きと血の通った、直ぐそばまで何時でも近寄っていけるような、現実に存在する「ほとけ」が必要であつたのである。昔から見て、聞いて馴染んできた修験道者のように、加持祈祷師のように、占い師のように、そして彼等よりもつとやさしく、いつでも其の懷に飛び込んでいけるような、慈悲深く、寛容な存在としての「ほとけ」が必要であつたのである。それが即ち聖徳太子であつた。それは仏教信仰そのものとは一味異なつた、しかし十分満足できるおいしさ、甘さを備えた身近な信仰であつた。

後に所謂、「お大師さん」としてしまわれる、弘法大師に対する信仰などもこうした同様の流れの上に成立したものである。

日本には、仏教信仰とは、信仰対象上些か異なつた聖徳太子信仰というような所謂独立信仰が成立するのであるが、その基盤は、仏教伝来以前から存在したのであつたし、仏教伝来以降も存在し続けていたのである、といえるであろう。

日本の仏教は、一方では国家仏教として、朝廷を中心として組織的な発展をとげていくのである。しかしもう一つの部分としては、日本古来からの神道の流れと同化するような形で、個別的、独立的な発展を遂げるものと、二つの道が有つたように考えられる。故に聖徳太子への信仰が、組織仏教の流れから些か外れて、神道的個別的な発展の延長線上に成立しても何ら不思議ではないのである。

聖徳太子信仰がある程度組織性を備えるようになるのは、更にかなり後のことである。

注

(1) かみ 大槻文彦は『隠身ノ意ナリト云フ、(かくばかり、かばかり。探女、さぐめ) 現身ニ対ス、(隠世、現世) 古事記、「天御中主神、云々、独神成坐、而隱身也」、靈異記、上、第四縁、聖徳太子、神人ヲ看破シタマヒシヲ「聖人之通眼、見隱身」としている。また大野晋が、「神」と「上」とは古代発音が異なるので、「神」は、「上にいる」から「かみ」という説は成り立ち難い、と謂うのは興味深い。

因みに『説文解字』で、「神」は、「天神引出万物者也从示申」とする。段玉裁は、「天神引三字同在古音第十二部」と注している。

白川静は、『字統』に、「声符は申。申は電光が斜めに屈折して走る形で、神威のあらわれるところ。：『説文』は神・引の疊韻をもつて訓する。『礼記、礼運』『鬼神に列す』の「鄭注」に、「神なるものは、物を引き出さしむ。祖廟山川五祀の屬を謂ふ」とあり、同じように音義的解釈を加えているが、漢代の言語学に共通するものである。神は天神、すなわち自然神であり、祖霊を含むことはなく、人の霊には鬼という。しかしのち、祖霊が升つて上帝の左右にあると考えられるようになって、「宗周鐘」「皇上帝百神」のうちに、祖霊をも含むものとみられ、「大克鼎」「申(神)に*孝す」には、神に対して*孝という祖霊に対する語を用いている」

中国で、祖霊と自然神が合体し、更に以降祖霊に重きが置かれるようになるのは恐らく、易姓革命である殷周革命の後の事であろう。

(2) 神道 此処では原始的「かむながらのみち」の事で、後世の所謂両部神道や宗源神道、垂加神道などの特定な神道宗派を指すわけではない。

(3) 本地垂迹 『維摩経・序』に、「非本無以垂迹、非迹無以顯本、本迹雖殊而不思議一也」とあり、また『観音玄義・上』に、「上地爲真爲本、下地爲応爲迹。」とあり、こうした仏性から、日本古代の神

は天竺という本地の仏の迹を日本に垂れて出現したものとし、天照大神は阿弥陀仏の垂迹である、という仏家の説。

(4) 神仏儒 神道、仏教、儒教の三種の宗教のこと。

(5) 太陽神 世界古代文明の多くは、太陽を神として崇めていた。エジプト文明、エーゲ文明などではそれが極めてはつきりしている。インドス文明や黄河文明ではあまりはつきりとはしていないが、ハラツバやヘモンジョダロなどの遺跡では、それを示唆するものはある。また中国での泰山などでの封禪の儀式などを考えると、恐らく其処には太陽を最高権威あるものと認める考えが介在しているものと想われる。

(6) 神話 日本のみならずギリシャ・ローマの神話もそうであるし、朝鮮の檀君神話などもそうである。

(7) 日本神話の系譜 日本神話を幾つかの系列に分けて考える事は今まで多くの日本神話研究者が行って来たことである。ここでは『日本神話の形成』松前健 塙書房 昭和四五年五月を参考とした。

(8) 比較神話学 スコット・リトルトン『新比較神話学 デュメジル理論の人類学的評価』堀美佐子訳、みず書房、一九八一年などを参考とした。

(9) 神名帳 復刻されている『延喜式』を見ればいいのであるが、此処では外山晴彦『神社のことがよくわかる本』東京書籍 二〇〇八年二月を参考とした。

(10) 天神地祇 和訓は、「あまつやしろくにつやしろ」とある。天の神、地の神ということであろう。「祇」は『説文』に、「地祇提出万物者也」とある。その段注には、「地祇提三字同在古音第十六部」とある。

また前掲『字統』で、白川は、「周礼、大宗伯」に「邦の天神・人鬼・地示の禮を建つ事を掌る」、「大司馬」に「地示を祭る」とあって示を用いる。「書、微子」に神祇の語はあるが、その篇は後出のもので、字の初義とは定めがたく、「詩、小雅、何人斯」「我を

して祗^ヒかならしむ」とあるのが最も古い例である。」としている。

(11) 司牧 岩波古典体系本の注では、「牧は家畜に子を生ませて繁殖させる事。司牧はそれを司る意。古訓のトトノフはその意を汲んだ訓。」とある。

(12) 命神亀 古訓は「うらへて」。亀の甲羅、或いは鹿の骨を焼いて占いをすること。

(13) 神班物者 岩波本の頭注には、「神に捧げる物をわかつ人。」とある。

(14) こうした女性が所謂巫女として神と人間世界の間を取り持つかのような役割を果たすのは世界の諸民族に見られるものである。時に若くて、高貴な女性を選ばれるのは、先ず子を生むと謂う機能が十分に発揮されると謂うことと、高貴であれば毎日忙しく労働に駆り出されるという事なく、神に仕えてその世話をするのに十分な余裕があるとされたからであろう。

(15) 檀君神話の成立に関する考察は、拙稿『檀君神話』成立時期の周辺』(阪南論集第四〇巻 二〇〇五年三月)において言及しておいた。

(二〇〇九年八月六日掲載決定)

○文中、引用した『日本書記』は小学館、「日本古典文学全集」一九九四年本を用いた。

○文中、引用した『風土記』は、岩波書店の「日本古典文学大系」昭和三十三年本を用いた。

○文中、引用した『三国遺事』は、『完訳三国遺事』朝日新聞社、昭和十一年を用いた。読み下し文は筆者が適当に行った。

〔附記〕

本拙稿は、頭初(論文)として提出したのであるが、本誌編集委員会の意向によって「研究ノート」に変更され、ここに掲載されたものである。